

2020/10/27

(うとQ世話し 辛うじて自らを「励ます」)

このコロナ禍のざわめきの中においてすら

「判で押したような毎日。同じことの繰り返し」

と感じている向きもいらっしゃるかと思います。

お金に窮している私共は、おしりに火がついている状態なので、そんなことを感じている暇はありませんが、そこそこ、余裕のある方程、そんな感じを抱いている気がしないでもありません。それは、この大波の下で相対的に安定度が増したような状態の年金生活者も含めてです。

しかしもとをただせば、コロナが来ようが来なかろうが、日々いろいろな変化が起きていることに変わりがなかったはずです。

ただ、それに気づいていたかどうか？

それに気づくか気づかないかの差は、自分の観察によれば「興味関心の対象範囲の広がり」に比例しているように思われます。

譬えて言えば、網を広く張っていれば、どこかしら、に何かが引っかかるでしょうし、網が小さいと、どこかしら、を何かが飛び交っているのに、気づかず見落として、今日は(今日も)何も起きなかったという錯覚に陥ってしまうのに似ています。

であるので

「判で押したような毎日。同じことの繰り返し」という、この退屈さ(変化に気づかないために感じる刺激の無さ)の原因は、上述の例に従えば「興味関心の対象範囲の狭さ」由来以外の何物でもないような気がします。

そうして、図らずも今コロナ禍に於いて、元々不安定極まりない生活を余儀なくされていた私共「中の下、下の上クラス」の階層の人間は、生存確保の為に否応なく「網(アンテナ・レーダー)」を拡げざるを得なくなっております。

むしろ今、曲がりなりにも「相対的に安定している階層」の方がある意味危険な状態にいると言えなくもありません。

自分の考えでは、恐らくこのメカニズムが新しい時代を切り開く「古来よりの常套(じょうとう)伝法」のような気がしないでもありません。

変革は中心からは起きない。必ずその時代の「辺境(不遇の片隅)から起きる」

何となくそう思って、苦しいばかりの状況下の自分を、辛うじて励ましております。